令和7年度 山形県地域づくり実践交流集会 実施報告

◆日時 ：11月30日（日）14:00～16:30
◆会場 ：遊学館第3研修室
◆テーマ：民俗芸能に学ぶ地域づくり～獅子踊りがつなぐ人と地域～
◆参加者：41名
◆内容 ： 県内外で地域づくりや地域学を実践している団体や地域づくりに関心のある方が集まり、より一層充実した活動を展開するための契機となるよう、地域づくりや地域学について学ぶ機会とした。今年度は米沢市の綱木獅子踊りを事例に、限界集落において民俗芸能がいかに継承されているのか、また、コミュニティの消滅が進行する中で、地域内外の人々が民俗芸能を介してどのようにつながりを作っているのかに焦点を当て、今後の地域づくりのヒントを探った。

14:00～	開会・オリエンテーション　　地域づくり・地域学とは？
14:10～	ミニレクチャー「綱木獅子踊りの歴史と今」 菊地和博 氏
15:00～ 16:30	インタビュー・トークセッション「綱木獅子踊りの担い手育成」 中川光雄 氏（綱木獅子踊り保存会会長） 加藤雅和 氏（綱木獅子踊り保存会副会長） 菊地和博 氏（東北文教大学名誉教授・山形県民俗芸能懇話会会長） 廣瀬隆人 氏（一般社団法人とちぎ市民協働研究会代表理事）

コーディネーター：廣瀬隆人 氏（一般社団法人とちぎ市民協働研究会代表理事）
講師・インタビュアー：菊地和博 氏（東北文教大学名誉教授・山形県民俗芸能懇話会会長）

◆当日の様子

プログラムはオリエンテーション、菊地和博氏によるミニレクチャー、米沢市綱木獅子踊り保存会へのインタビュー・トークセッションの順に開催された。オリエンテーションではコーディネーターの廣瀬氏より、昨年から続く民俗芸能を取り上げた今回の企画の趣旨についてご説明があった。

その後、菊地和博氏より、綱木獅子踊りの歴史、特徴、現況について映像を交えてお話しいただいた。綱木地区は、かつて福島県会津地方と米沢地方を結ぶ会津街道の宿場町として栄えていたが、昭和40年頃から鉄道普及によりその役割を失い人口が減少。現在は3世帯3人が暮らす限界集落となっている。

綱木獅子踊りは、江戸時代に栃木県今市に源流を持つ関東系三頭獅子舞が会津地方（会津彼岸獅子）を経て、会津街道を通って伝播し、成立に影響を与えたと考えられている。また、置賜地方と村山地方以北の獅子踊り（五頭や七頭）の特徴の違いについても解説いただいた。綱木獅子踊りは全40演

目で構成され、先祖供養と五穀豊穣を祈る役割を担っている。かつては8月14日～16日のお盆の期間中に円照寺の境内と家々を巡って夜通し踊られていたが、現在は8月15日の昼に円照寺境内で奉納されている。集落の人口減少に伴い、獅子踊りの継承が課題となる中、平成12年に「綱木獅子踊りを考える会」が発足。担い手不足により存亡の危機に直面したが、平成18年に集落から離村して暮らす若者たちが保存会に加入し立ち直しのきっかけとなる。その後、綱木地域出身者以外や女性の参加も認められ、現在の活動につながっていることをお話しいただいた。

次のインタビュー・トークセッションでは、綱木獅子踊り保存会の中川氏と加藤氏へのインタビューを中心に議論された。まず、綱木獅子踊りの最大の特徴とは獅子頭の迫力と三頭の非同調性が挙げられる。必ずしも三頭が同じ動作をしない場面も多く、中ジシ（雌獅子）、先ジシ（雄獅子）、後ジシ（雄獅子）それぞれのキャラクター性と各踊り手の解釈やアドリブ性も許容するような、音楽で言うとジャズのセッションのような一面もあるとのこと。また、演目数が多く、熟練に至るまでの労力が大きいことを語られた。

また、担い手育成については、門外不出の掟を時代の流れに応じ、いくつかの決まり事をゆるめ門戸を開いてきた。具体的には、これまで口承で継承されてきた笛、太鼓、歌の譜面を作成したり、踊りを映像化することで、新たな加入者が覚えやすいように工夫しているという。現在、練習は綱木地区ではなく、米沢市南原コミュニティセンターで行っているが、綱木で生まれた芸能として、綱木の場で継承していきたいという思いが強い。南原地区住民も、綱木獅子踊りを「綱木のもの」として認識している現状がある。今後の方向性として、綱木獅子踊りのステータスを上げることで多様な人が縁を結び、継承していく方が現実的であると考えている。綱木に住人がいなくなっても、獅子踊りを通じて綱木という地域を人々の繋がりの中に残したいと語られた。会場では、ゲストの加藤氏が笛をご披露くださり、座敷でお酒とご馳走をいただいた際の返礼歌「さかな歌」の一節が響き渡った。

参加者からの質問も活発に行われ、存続の危機を乗り越えた経緯や女人禁制の決まり事を撤廃した背景にも議論が及んだ。そこには保存会の徹底した「話し合い」があることが語られた。今回、綱木地区出身者や保存会メンバーにも多く参加いただいた。笛を担当されている女性は、「自分は地域外の人間であり、わからないことも多いが、関わることでおもしろさを感じている」と語った。また、幼少期を綱木地区で過ごし、その思い出のエッセイを執筆した女性は、父親から「男だったら獅子踊りを継いでほしかった」と言われて育った経緯を持っている。毎年お盆に綱木に踊りを見に行き、お花代（寄付金）以外にもっと応援できることはないかと考えた末、エッセイを執筆された。執筆を通じて、「人との繋がりが結局大事なんだ」ということを再認識し、自身が幼少期に、獅子踊りの後の打ち上げで出す鯨汁の材料集めなど、地域行事の手伝いをしながら獅子踊りのある中で育ってきたことが継承に繋がった。400 年続いたということは、400 年前の先祖

の踊りが血肉となり、今の継承者たちの「生きる力」になっているのではないかと語られた。さらに、祖父、父と何代にもわたり綱木獅子踊りで先ジシを演じてきた家系の20代の男性は、幼少期から父の背中を見ながら憧れを抱き、現在は県外在住でありながら立派な踊り手として父の役割を引き継いで活動している。廣瀬氏は、このように故郷を離れた人（他出子）が、親や故郷との絆を通じて活動を続ける姿は、中山間地域の担い手育成のキーワードとして注目されていると語った。

最後のまとめでは、菊地氏は他地域の11年ぶりに復活した獅子踊りの事例を挙げ、それは地域の要請に応えて復活したのに対し、綱木獅子踊りは地域が限界集落となり、担い手側（離村した人々）が自ら立ち上がって、聖地である綱木に出かけていくという逆のパターンを取っている。厳しい環境下でも「やる気」と「やり方」次第で文化を存続できることを示しており、「限界集落の芸能文化はかくあるべし」というモデルケースであると語られた。また、コーディネーターの廣瀬氏は、このような話合いで物事を決めていく文化は、戦後の日本の社会教育、特に山形県で顕著だった青年団活動の伝統が生きていた成果であることを指摘した。また、民俗芸能や伝統芸能の継承活動は、単なる文化活動ではなく人と人、地域を結び付け、「地域づくり」や「社会教育」が埋め込まれている。民俗芸能は、古の人たちからの「地域の人と仲良く暮らしていくんだよ」という強いメッセージを伝えるものであり、今回の地域づくり実践交流集会を通じてその力を感じることができたと締めくくった。

参加者 Voice

・存亡の危機を乗り越えた団体の現状を知ることができ、私も保存活動をより精力的にやっていこうと改めて考えさせられました。
・大学で鹿楽招旭踊（山形市高瀬地区の獅子踊り）に関わる機会があり、いかに伝えていくかという問題に大変興味がありました。実際の例を関わっている方からお聞きすることができてよかった。
・他の地域の民俗芸能について様々なことを知ることができた。探究活動にも活かしていきたいと思った。
・一筋縄ではない地域の伝統芸能の継承の思い、価値の認識・重責・熱意・誇りを感じられて、改めて考えさせられた。
・綱木地区の獅子踊りに誇りを感じた。継続するにはどうしたら良いか考え話し合った上で現在があるということがよく分かりました。地元に目を向けることの大切さ、親が子に何を残せるのか考えることが必要。
・苦境にありながら守り継いできた芸能を「新たに人をつなぐ「核」として伝承してきた知恵と努力に感動した。
・子どもの頃、故郷の楽しい思い出が将来の担い手育成につながると思った。
・初めて参加してみて、他の地域の活動を詳しく知れたし、自分の地域のイベントについても考えられそうなのでとてもよい勉強になりました。
・今後も小さくても続いている祭り、伝統文化を取り上げていただきたいです。自分が住んでいる所ではこういった伝統文化がないので羨ましいです。しかし、参加するには伝えていらっしゃる方々の気持ちや守っているものを拒まないようにする。そして、半端な気持ちでの参加はできないと思いました。今回の事例を通して、考えさせられるとともにすばらしい活動だと思いました。